

12月総評 暮田真名

絵に描いたような人だ

雨に濡れたらしみそう

のじ

「絵に描いたような○○」という定型句がある。いかにもそれらしい、というほどの意味か。「絵に描いたような人」は、それ自体興味深い。二行目でイメージはさらに展開し、絵の具が溶けていく。読み終えたときには、「絵に描いたような」という定型句が無効化されている。

ビクターの犬に耳打ちされている

猪山鉦一

ビクターのロゴマークの犬は、蓄音機に録音された亡き飼い主の声に耳を傾けている、という逸話がある。ずっと「聞く側」だった犬が「話す側」に回るとき、彼の主人の声が聞こえてくるのではないかと思ってしまう。

脳みそを分け入ってみる四畳半

青木菓子

そもそも「脳みそを分け入」ることは不可能なのだが、脳みそはちょうどよく二つに分かれてもいるし、なんとか入っていけそうな気もする。「四畳半」の狭さも、不思議なリアリティを醸し出している。

プリンパフェの完璧な造形を見よ

ここから先に無意識がある

雲理そら

意識と無意識の関係は氷山に例えられる。海面から見えている部分が意識で、海の中にはその何十倍もの無意識がある。それを踏まえると、机の上に置かれたプリンパフェが水面から顔を出しているようで、おもしろい。

包丁の寝てても立っている感じ

おかもと

極限まで散文化すると、「包丁は置いてあっても危ない」だろうか。「寝ている／立っている」の比喩は擬人化と言ってしまうとそれまでだが、なにかそれ以上に包丁の気配のようなものを捉えることに成功している。

冬晴れにもたれて歩くこのごろの

川はさめざめ出ていくばかり

高田皓輔

「冬晴れにもたれる」「川は出ていく」など、我々の知らない物理法則に基づく動詞を、「このごろの」や「さめざめ」といったパーツが支える。「さめざめ」が特に良く、「さめざめと泣く」という定型句からは悲しみが、「冷め」という音からは川の冷たさが、読み手に迫ってくるような気がする。

アンドロイド漱石ひとりでに滝へ

互井宇宙論

技術の進歩により、「アンドロイドマツコ」など、著名人を模したロボットが作られるようになった。「アンドロイド漱石」も、既にいたように思う。真っ直ぐに落ちる滝からの連想で、アンドロイド漱石も、直立ですーっと動いているような気がする。

個体差があります母も鯛焼も

檜野 美果子

「母」という言葉で一緒くたに語られがちだが、母親も人間であるからには一人一人違った生き物である。そのことを「鯛焼の個体差」という視覚的なイメージにわかりやすく起こした。また、鯛焼は個体差があるとはいえ型に嵌められたものであり、そもそも命のないものであるところにアイロニーがある。

こころって何ですか
ちゃんちゃんこ着る

小西電波

何歳の人が着るという決まりはないけれど、ちゃんちゃんこには還暦のお祝いのイメージがある。「こころって何ですか」という根元的で子供のような問いと、老いも連想させるちゃんちゃんこの取り合わせが不思議ときまっている。

湯舟とは平らになって会うところ

桜庭 紀子

きわめてプライベートな空間である「湯舟」と「会う」の取り合わせに、まず驚きがある。そして「平らにな」というのも、湯舟に浸かる姿勢としては不自然だ。人ではなく、お湯そのものに変身したかのようだ。